

## 絵本の読み聞かせの実践的探究—『もりのなか』を通して—

前田 眞 澄

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年5月24日受付、2022年7月1日受理)

### 要 旨

短期大学で幼稚園教諭・保育士になろうとする人を育てる時、絵本の読み聞かせが実際にできる人にするのは、極めて重要なことである。その際、書かれた文や文章を暗誦してしまわない限り、幼児を前にしていても絵本に目をやり、理解する過程とそれを向き直って幼児に声で語る過程とが不可欠である。この二分説を守るとすると、そこに書かれている言葉を理解して覚えて、自分のものにして語る必要性が出てくる。それをエッツ『もりのなか』によって実地に自らに課し、幼児に（実際には短大生に）読み聞かせることができるようになるかどうか、検証していく。

キーワード：『もりのなか』、読み聞かせ、絵本の文章を頭に入れる過程、幼児に向かって声を届ける過程

### はじめに—本研究の目的・方法、資料—

短期大学で幼稚園教諭・保育士になろうとする人を育てる時、絵本の読み聞かせが実際にできる人にすることは不可欠のことである。本稿はその指導の筋道を明らかにすることを目的としている。実際に絵本を読み聞かせする場を想定してみると、文章を暗記していない限り、教師が次の見開きをあけてここで読むべき文や文章を頭に入れる過程と幼児たちの方を向いてみんなに語る過程との二つに分かれよう。一人や二人に家庭などで読み聞かせるばあいとは異なり、同じ方向から見て読むわけにはいかず、便宜上絵本は幼児の方に向けたまま、教師が絵本の前脇もしくは横に立ち、絵本の方を見たり、幼児たちに正対して語り聞かせたりして、幼児たちが絵本の絵と文とを結び付けられるようにするわけである。この二つの営みをつなぐのが、教師が見開きの場面、もしくは開いた各ページごとに書かれている文や文章を読んで頭に入れることである。しかし、簡単な一文ならよいが、文でも複雑な場合もあり、何文かにわたるものも多い。そうなると、そのようなさまざまな絵本を具体的にどのように覚え、幼児に向かって読み聞かせていくのが問題になってくる。

考察者は、本学に来て以降、絵本を取り上げて以下のような論文を公にしてきた。

- ① 「絵本を読み深め、読み聞かせる力をつけるための一方策」(その1)、『九州女子大学学術情報センター研究紀要』第2巻、九州女子大学学術情報センター、2019(平成31)年3月20日発行、p89-95
- ② 「幼児の反応から絵本を読み直し、指導の方法を探る—エッツ『もりのなか』を手がかりにして—」『九州女子大学学術情報センター研究紀要』第3巻、九州女子大学学術情報センター、2020(令和2)年3月2日発行、p127-136
- ③ 「人間成長物語としての絵本の研究—『しょうぼうじどうしゃ じふた』を手がかりとして—」『九州女子大学紀要』57巻2号、九州女子大学・九州女子短期大学、令和3(2021)年3月31日発行、p135-148
- ④ 「人間成長物語としての絵本『ぐるんぱのようちえん』の一考察」『九州女子大学学術情報センター研究紀要』第4巻、九州女子大学学術情報センター、令和3(2021)年3月15日発行、p31-40
- ⑤ 「誰が誰になぜ言っているのかに着目した絵本の展開の研究—『あさになったのでまどをあけますよ』(荒井良二)を手がかりとして—」『九州女子大学紀要』第58巻1号、九州女子大学・九州女子短期大学、令和3(2021)年9月30日発行、P51-61

本稿では、上記の論述には書くことのできなかった絵本を読み聞かせるために実際にどのような筋道をたどればよいかを明らかにしていくことを目的とする。

## 一 エッツ『もりのなか』の本文を知的に整理する

### 1 表表紙を見せる時

「もりのなか」という題のみ読むのであれば、一目見て読めようが、裏表紙には「読んであげるなら 2 歳から」とある。相手が4歳以上となると、そろそろ「マリー・ホール・エッツぶん・え」などを加えるか否か、読むとすればエッツだけでよいか、マリー・ホール・エッツと略さずに読むべきか、あらかじめ考えておかなければなるまい。他にも紹介できる絵本があれば丁寧に紹介するのが基本であろう。「ぶん・え」は、「ぶんとえ」と読むのがよかろう。読むとすれば、「もりのなか、マリー・ホール・エッツぶんとえ。」と、一息で読めば、少し苦しくなり、題の印象が弱くなったり、最後の「ぶんとえ」が聞こえにくくなったりしかねない。贅沢な気がしても、「もりのなか。マリー・ホール・エッツ、ぶんとえ。」と、二呼吸分使ってしつかり何と何を伝えたいのかわかるようにすべきであろう。そうすると、どうしても読み手の中に「もりのなか」とエッツとを結びつける連想がすでに働いていなければならない。エッツには、『またもりへ』（福音館書店）という同じ主人公が動物たちと出会うお話があること、また別に『わたしとあそんで』（福音館書店）という女の子を主人公とするお話もあることを予備知識として持つておけば、エッツと「もりのなか」との結びつきは強固なものになる。

### 2 本文に入って

#### (1) 森へ

標題紙の下で珍しい帽子をかぶって片手で持ったラッパを吹こうとしていた男の子が3ページ目にもそのままの格好で出て来て、森の木々が立ち並ぶなか、大きな木の近くで前と同様に片手をラッパに添えて今まさに吹こうとしている。

その下欄に本文があり、一人称で「ぼくは、かみのぼうしをかぶり、あたらしいらっぱをもって、」で切れている。ここでは①紙の帽子をかぶり、②新しいラッパを持って と二つのことが列挙されている。①の紙の帽子〈注1〉は、わざわざ書いているところを見ると、自分で新聞紙を円すい状に糊で貼り、ぼうしに見立てたものであろう。貼った跡が幾分へこんで、アクセントになっている。これを作れたのがうれしくて、そのまま森にかぶってきたものようである。②の新しいラッパは、この話の最後に出てくる父親にでも買ってもらったのだろうか。うれしくて、ラッパが吹きたくてたまらないことであろう。ラッパには小さい子用らしく取手(とって)がついていて、そこに片手を入れて持ちやすく、またそこで安定させて吹きやすくしている。その新しいラッパをもってどうするのかは、次の見開きを開けるまで待つことになる。ここまでふくらませれば、「ぼくは、①かみのぼうしをかぶり、②あたらしいらっぱをもって、」がどちらも主人公のどうしても言いたいことであり、読み手もその気になって一つ目の頭に載せた帽子の方から、二つ目の新しいラッパを持っていることに進んでいくことを確かめなければなるまい。しかも、ここで言いたいことは終わらず、後に続いていくように気持ちを残して「もって、」と読まなければならないことが、頭に刻まれよう。

見開き一面になっておらず、左の4ページ側に続けて、「もりへ、さんぼにでかけました。」と記される。覚える時には、これ全体が③だと見なした方がよいが、前ページからつながる文としては「ぼくは、もりへ、さんぼにでかけました。」という骨格をなす部分のうち、どこへ何をしに出かけたのかがここに集中している。先に①・②はどちらもこの子の言いたいことがつまっているのとらえたのに、それらは、かぶるもの・持つものとして付随的にそれぞれ大切であるにとどまる。肝心なのはこちらだったのである。また、「でかけました」という過去形に、(ア) 森へ ということと、(イ) 散歩に ということとの二つがかかっているのも、見のがせない。これらを含めて、一文の中では三番目に語られているのである。この一文は、書かれてはいないが「だから今森の中に来ているのです。」という思いを内包している。それがこのページの絵に描かれている。改めて森の中を眺めてみると、近くの木々は見れば見るほど大きく、しかもどこまで行ってもまだ木が植わっているのではないかと思えるほど奥までありそうである。さっきはラッパを口につけ、吹き出す気でいたのに、森のたたずまいに気おされてか、一旦ラッパを下ろしてしまう。それゆえ、ここで間を取り、森の中に幼児にも入らせ、主人公とともに、木々の大きさとそれが森の奥までずっと続いているなあとという思いを感じさせたいところである。主人公は、幾分寂しさを覚えているかもしれない。

## (2) さまざまな動物に出会い、列をなしてともに散歩する

## (ア) ライオン、象の子たち、熊たちが散歩に加わる

ところが、右側の5ページに移ると、

すると、おおきならいおんが、ひるねをしていました。らいおんは、ぼくのらっぱをきいて、めをさしました。

のように、うれしいことに話が動き始める。絵では、たしかに画面の中央に大きなライオンが前足を枕に眠っている。人がうとうとする様子に似ているので、確にお昼寝なのであろう。左側後方にいる主人公と比べると、数倍は大きい。ただし、前のたてがみが格好よく立ってそろっている。ふと見ると、ライオンの手前には、使い過ぎてか、はが一本欠けたくしと王冠とが置かれている。ここまでが一文目の「すると、おおきならいおんが、ひるねをしていました。」である。このライオンに会ったことで主人公はずいぶん心強くなったらしく、つい両手で持ってラッパを鳴らしてしまう。それで、ライオンは目をさますことになる。これが第二文「らいおんは、ぼくのらっぱをきいて、めをさしました。」になる。主文は、「らいおんは、めをさしました。」であり、「ぼくのらっぱをきいて」が副次的な文になる。第一文が、「すると」で始まって、ぼくの視界に入った大きなライオンが何をしていたかであり、第二文は、そのライオンが、ぼくの何を聞いて、目を覚ましたのかである。ライオンが初めて紹介される時だけ「おおきい」という形容詞がつくが、それ以外は何の修飾語もつかない端的な文である。二文あっても、まちがえにくい。なお、日本語の文では、最初に紹介される時には「が」であるが、次に掲げる時には「は」になる。以下もすべてそうになっている。

ページをめくると、左側(6ページ)に口元からラッパを放したばかりの「ぼく」がライオンに近づいて、親しく話し合う光景が目に入る。ライオンは起きて間もないためか体勢はそのままであるが、笑顔で主人公に接し、少し前足まで挙げています。しっぽも立てぎみである。文としては、まず「『どこへいくんだい?』と、らいおんがききました。」とある。「ぼく」から近寄ったため、声はライオンが先にかけてようである。それに主人公は答えたはずだが、返事は書かれていない。全文が「ぼく」の回想であるため、よほど書いておかないと思わない限り、省かれるのである。それ以上に主人公の関心は、ライオンがついてきてくれるかどうか集中する。その発言が続く「ちゃんとかみをとかしたら、ぼくもついていっていいかい?」の文である。ライオンが王冠をかぶるため、身づくろいの中で唯一心がけている髪をとかすことは外せないが、それさえ待ってもらえれば、この森の中で散歩するのに主人公についていきたいというのである。願ってもない申し出なので、むろん承知する。それも、当然のことなので書かれていない。ここまでが6ページ分である。右側7ページには、前ページより予測される前半部、「そしてらいおんはかみをとかすと、」と言う条件節とその絵が描かれ、次の左側8ページには、髪をとかして気持ちよく王冠をかぶり、ラッパを吹きながら歩き出すぼくの後から、にこにこしながら「ぼくのさんぽについてきました。」と何についてきたかという後半部が記される。ファンタジーにふさわしく、ライオンは後ろ足だけで立ってついてくるのである。ここでも、7ページの「そして」から始まる文には不可欠な言葉だけ述べられる。

右側9ページの絵には、木々のそばを流れる川の浅瀬で、子象たちが楽しそうに長い鼻で噴水のように頭から水をかけている。背景にタオルやセーター、靴などがあることから水浴びをしているところと推測がつく。本文の第一文には、はたして「二ひきのぞうのこどもがみずあびをしていました。」と主部も丁寧に紹介されるが、第二文には短く「ぞうのこたちはぼくをみると、みずあびをやめました。」という。水浴びを途中でやめることになって、少し気の毒にも思えてくるころだが、次を開いて左側10ページの文「まってくださいあい」ぞうのこたちは、みみをふきながらいいました。一でわかってくる。象の子たちは、「ぼく」の散歩についていこうとして、そのために水浴びをしていたのである。絵でも、象の子たちの方が、ラッパを吹いて散歩する主人公らに向けて、手を振ったり、あわててタオルで耳を拭いたりしている。平然とはしているが、「ぼく」は心の中では嬉しかったに違いない。このような経緯が理解できると、9ページの第一文「二ひきのぞうのこどもがみずあびをしていました。」と第二文「ぞうのこたちはぼくをみると、み



ずあびをやめました。」も、なだらかにつながってくる。そればかりか、10ページの絵で主人公たちに合図を送り、文でも「まってくださあい」と大きな耳を拭きながらも口に出さざるを得ない理由がのみこめてくる。11・12ページでは、先に「そして、ライオンはかみをとかすと、ぼくのさんぼについてきました。」というのと同じように、象の子たちは、「それから、一ぴきはせーたーをきて、もう一ぴきは、くつをはいて、／ぼくのさんぼについてきました。」(／はページを改めたところ)となるのである。

右側13ページの本文に目を移すと、「きのしたに、二ひきのおおきなちやいろのくまがすわっていました。くまたちは、ぴーなつつのかずをかぞえたり、じゃむをなめたりしていました。」とある。ライオンと熊については、森のどこにいたかという修飾語がなかったが、ここで初めて「きのしたに、」という場所が特定される。主部については、「おおきならいおんが」→「二ひきのぞうのこどもが」→「二ひきのおおきなちやいろのくまが」と変わるが、述部は、「ひるねをしていました」→「みずあびをしていました」→「すわっていました」といずれも端的な言い方になっている。助数詞はいずれも「ひき」であり、語り手にはまだそれしか言えないみたいである。しかし、複数いても二ひきまでであり、続いて出てくることもあって、覚えやすい。「おおきな」と形容されるのは、ライオンも熊も大人の動物に対してである。いくら客観的には大きくても、象の子たちにはつけていない。熊のみ「ちやいろの」と色がわかるものになっている。ここまでが第一文で気づくことである。第二文になると、前に「二ひきのぞうのこども」が「ぞうのこたち」に圧縮されたように、「二ひきのおおきなちやいろのくま」が「くまたち」になり、絵のとおり「ぴーなつつのかずをかぞえたり、じゃむをなめたりしていました。」とある。

次を開くと、左側14ページの文は、ライオンや象の子たちと同様に、熊たちの方から声をかけている。

「ちょっとまって！ぼくたちもいっしょにいきますよお。」と、くまたちはおおきなこえでいいました。

ライオンは貫禄をもって「どこへいくんだい？」と常体で言って、いったん話を切り、その後に「ちゃんとかみをとかしたら、ぼくもついていっていいかい？」と希望を述べた。象の子たちは、自分たちが幼いことを自覚していて、「まってくださあい。」と敬体を用いて頼んでいた。それに対して、熊たちは親しさもあり、丁寧と言おうという気持ちも交じるのか、中間的な言いかたになっている。象の子たちは、耳も拭き、セーターを着たり靴をはいたり時間もかかると思っていて、初めから「まってくださあい。」とお願いしていたが、熊たちは、すぐに準備できる気があって、「ちょっとまって！ぼくたちもいっしょにいきますよお。」という表現になったという面も見のがせまい。絵もちょうど主人公たちと目が合っているらしく、二匹の熊とも真正面を見ている。「ぼく」も立ち止まらざるを得まい。右側15ページの文では、「そしてくまたちは、ぴーなつつと、じゃむとおさじをもって、」とあって、絵ではにこにこしながら主人公に近づき、次の左側16ページには、三たび「ぼくのさんぼについてきました。」の文末表現が続く。絵は、森の中を歩くラッパを吹く主人公、ライオン、象の子たち、熊たちと散歩の列が少しずつできてくる。ここまでの散歩の列としては、第一群と言えようか。

#### (イ) カンガルー一家、こうのとりの、さるたちも散歩に加わる

隣の右側17ページには、本文が「しばらくいくと、おとうさんかんがるーとおかあさんかんがるーが、あかちゃんに、とびかたをおしえていました。」とある。絵も確かにそうなっている。ライオン、象の子たち、熊たちと散歩していて、幾分今までは違うカンガルーの家族と出会ったのである。

すると、次に開いた左側18ページでは、ここでもうれしいことに、カンガルーの方から話しかけてくる。

「わたしたちはたいこをもっていきますわ。」と、おかあさんかんがるーが、いいました。「それに、あかんぼうも、ちっともじゃまにはなりませんよ。ぼけつとにいれていきますからね。」

会話の間に地の文をはさむ形式は、第一群初めの『「どこへいくんだい？」』と、らいおんがききました。『ちゃんとかみをとかしたら、ぼくもついていっていいかい？』』と一致している。文数は一文多いが、語り手

の意識に共通するものがあるのであろう。この場面からは、楽器に類するものが出てくる。それがおかあさんカンガルーの発する一文目に現れてくる。この家族も、天から「ぼく」の散歩についていくつもりなのである。その際に、太鼓を持っていくから役に立ちますよと言っているのである。前ページの赤ちゃんに跳び方を教えていたのも、一緒に親子で跳びながら散歩に行けたらどれほど楽しいことかと考えていたのかもしれない。ただ、おかあさんカンガルーであるだけに、他方でまだ跳び方が上手にならなくても大丈夫という配慮もしている。続いての発言、「それに、あかんぼうも、ちっともじゃまにはなりませんよ。ぼけつとにいられていきますからね。」がそれである。

右側19ページの「そして」の後には、おかあさんカンガルーの言葉に応ずるかのように「あかちゃんは、おかあさんのおなかのふくろにとびこんで、」とある副次的な文がもりこまれ、「かんがる一たちも、」という主語の中に赤ちゃんカンガルーも加わって、20ページにある四つ目の「ぼくのさんぼについてきました。」に行き着くのである。(絵にはおかあさんカンガルーのおなかの袋にとび込んだ赤ちゃんカンガルーが、ちゃんと袋から顔を出して、父と母の太鼓を待っていましたとばかりに聞いている。)

右側21ページでは、新たにこうのとりが現れる。いきさつが以下の二文に描かれる。

としとったはいいろのこうのとりが、いけのそばにしゃがんでいました。あんまりじっとしているの  
で、いきているのかどうかふしぎになって、ぼくは、そばまでいってみました。

第一文は、「すると」と書き出して一つ目のライオンがおり、「しばらくすると」で四つ目のカンガルーの家族が出てくるが、それ以外はいずれも接続詞抜きの紹介になる。「としとったはいいろのこうのとりが、」という主部は、唯一の年よった生き物であり、色もくすんだ灰色で、珍しい。述部で、池のそばに「しゃがんでい」るのも、年をとっているためにそういう姿勢でいるのかもしれない。前文がコウノトリが何のそばにおり、どんなふうな状態でいたかであったことを受けて、第二文では、「あんまりじっとしている」ため、かえって「いきているのかどうかふしぎになって、」主人公の方から好奇心を満たすための行動に出る。それが「ぼくは、そばまでいってみました。」である。二つの文が切っても切れないように、結びついている。絵でも、列をなしていた動物たちはその場を動かさず、コウノトリをかたずをのんで見守っている。

次の左側22ページでは、その後どうなったかが語られる。

すると、こうのとりはたちあがって、ぼくをみました。(絵は、コウノトリが膝を立てて急に背丈が  
高くなり、ラッパをおろした主人公と間近で顔を見合っているところである。) こうのとりは、なんにも  
いいませんでした。ぼくが、みんなのほうへもどっていくと、このみょうなとりもついてきました。

第一文は、じっとしたままで、ほとんど息をしているかどうか不明であったコウノトリが立ち上がり、視線を向けたため、安堵したところであろう。第二文では、だからといって、コウノトリは他の動物のように何か応えるわけではなく、一言も発しないのに驚いたが、「こうのとりは、なんにもいいませんでした、」—ただ、「ぼくが、みんなのほうへもどっていくと、このみょうなとりもついてきました」というのである。妙な鳥だとは思っているものの、ついては来るのだから、この鳥も散歩には来るのだと了解したわけである。コウノトリへの言及は、二ページだけで、これまでの例のように「ぼくのさんぼについてきました。」という決まり文句は拳がっていない。そこまで書かなくても、「ついてき」た以上、ぼくの散歩には当然ついてくるのである。しかし、あえて書かないことによって、変化があり、単調になるのを防いでいる。

右側23ページには、目を向ける場所がぐんと違ってくる。本文では、「ちいさなざるが二ひき、たかいきのうえであそんでいました。」とある。絵も手足も尾も自在に操って、こちらの木の枝、あちらの木の枝と映る猿二匹が描かれている。文にある通り高い木の上らしく、幹らしいところは画面のずっと下にあるのか、全く出てきていない。猿たちが小さいかどうか、判断がしにくいのが、確かに敏捷性に富んでいるようで、はしっこく見える。また、これまで登場した動物たちは、ライオン、象の子たち、熊たちと大きく、第二群に入っても、カンガルー、コウノトリも小さい方ではなかったのである。それらに比して、猿たちはやはり小

さいのであろう。そして、高い木の上で遊んでいたというのも、まちがいなく他の生き物よりもふさわしかろう。今までどの動物も遊んでいたわけではなかったのである。

次の左側24ページには、以下のような本文がある。

けれども、ぼくをみると、あそぶのをやめてさげびました。

「ぎょうれつだ！ぎょうれつだ！ぼくらは、ぎょうれつだいですきだ！」

前にも、象の子たちが「ぼくをみると、」（いよいよついていけるとわくわくして）水浴びをやめたという記述があったが、第一文では、猿たちにとって木の上で遊ぶことよりもさらに熱中できるため、遊ぶのをやめて叫ぶのである。絵でも、二匹の猿が下を通る「ぼく」たちに注がれる目には好奇心に満ちている。第二文、第三文では散歩の行列に着目して「ぎょうれつだ！」を連呼し、第四文では声を合わせてかわざわざ「ぼくらは行列 大好きだ。」とまで言い合う。この猿たちによって、森の中を散歩する「ぼく」たち一行は、行列として見直され、自分たちでも改めて行列として進んでいることを自覚させられたことであろう。

その右手25ページの絵と文は、ぴったり合っていて、「そして、二ひきのさるは、きのうろから、よそいきのようふくをだして」身づくろいを整える。26-27ページは、初めて見開き一面を使って、絵でこの時点での行列を聞き手の眼前にはっきり示し、文でも「みんなとっしょに、ぼくのさんぼについてきました。」と書くに至る。ここまでで、第二群もそろったと言えよう。

(ウ) うさぎにも声をかけ、森の中を進む散歩の行列が完成する

左手28ページからは、「ぼく」の視点が入って来る。絵には、木々の間に少しだけのある草とそれよりも小さいうさぎが描かれている。文は、「すこしいくと、せのたかいくさのかげに、うさぎがいるのをみつけました。」とある。「すると」でライオン以下の第一群の動物たちが出て来、「しばらくいくと」でカンガルー以降の第二群の動物たちが出て来た。「すこしいくと」はさりげなくうさぎが第三群の動物であることを示唆しよう。絵では口に脇にある草の実をくわえている。うさぎの小さいことは草の陰に見つけたとあることでも知られよう。しかし、猿の半分くらいしかない存在だけに、見つけた方としてはかわいく思うこともひとしおである。右手29ページの絵では後ろ足だけで立って穏やかな表情も浮かべている。抱きしめたいような思いにもなっている。それだけに、どんなふうに声をかけるかが肝心である。ここでは、本文は以下のように記されている。

「こわがらなくっていいんだよ。」と、ぼくは、とおくからうさぎにいいました。「きたけりゃ、ぼくとならんでくればいいよ。」それで、うさぎもやってきました。

近づきたい気持ちはやまやまであるが、それを抑えて距離を十分に保って「とおくから」、もしかしたら怖がるかもしれないと最大限気を使って「こわがらなくっていいんだよ。」とわざわざ声をかける。そして、来ても来なくても君のしたいようにしていいことを保証しながら、もし来たいというのであれば—「きたけりゃ—、ぼくの隣を確保するから「ぼくとならんでくればいいよ。」と、主人公の好意をできるだけ伝えるようにしたというのである。うさぎにも、「ぼく」のこころづかいもしっかり伝わったようで、「それで、うさぎもやってきました。」となる。最高の結果が得られたわけである。

次の見開き一面(30-31ページ)が、ぼくの願っていた森の中を散歩する行列の完成した形になる。本文を引用する。

ぼくはらっぱをふきました。らいおんはほえました。ぞうははなをならし、おおきなくまは、うなりました。かんがる—はたいこをたたき、こうのとりは、くちばしをならしました。さるは、おおきなこえでさげびながら、てをたたきました。けれども、うさぎは、なんにもいわないで、ぼくのさんぼについてきました。

6文で、すべての登場人物の活躍ぶりを取り上げている。しかし、単数か複数かは省き、多くは一点に絞っている。第一文・第二文は「ぼくはらっぱをふきました。らいおんはほえました。」と単文で言い切っている。どう吹くか、どのようにほえるのかなどは、全く入らない。ただし、このように一文で一種の動物だけ挙げていくだけでは文数がふえていくため、第三文は「ぞうは、はなをならし、おおきなくまはうなりました。」と重文になっていく。ほえるは、猛獣などが大声をあげる状態を指すが、はなをならすは甘え声を出す状態、うなるは猛獣が低く吠える状態だと辞書にある。いずれも、ライオン、象、熊にふさわしい声の出し方と言えよう。主人公と第一群は以上であるが、第二群は、第四文「かんがるーは、たいこをたたき、こうのとりは、くちばしをならしました。」のように重文で始まり、第五文の「さるは、こえでさけびながら、てをたたきました。」と、一動物で二つの行動を同時に行っている。それだけに、第一群と逆に、はじめの二つの動物を重文で挙げ、三番目の猿だけ独立させる順序であっても、単調に墮していない。さらに、第三群のうさぎは、「けれども、」と逆接で受けて、他の動物とは違って、「なんにもいわないで、ぼくのさんぼについて」くることで、独自の存在感を発揮している。すでに「ぼくとならんでくればいい」と言われているため、絵でもラッパをふく主人公の隣に自然に並んで歩いている。足並みが「ぼく」とそろえばかりか、ライオン、象、熊、猿とも同じくしており、みんなが自ずと息を合わせて行列を作り上げていることが伝わってくる。この絵本の最高潮に達した場面と言えよう。

### (3) 一休みし、みんなで遊ぶ

次に開いた32ページから、また1ページごとの絵にもどる。本文は、下記のように、三文ある。

しばらくいくと、だれかがぴくにつくをしたあとがありました。そこでぼくたちは、ひとやすみして、ぴーなつつやじゃむをたべました。また、そこにあった、あいすくりーむやおかしもたべました。

前ページ見開き一面の高揚感が続いていたのであろう。それで行列を作って散歩を存分に楽しんだために、第一文で「しばらくいくと、」となっているのであろう。木々の間に「だれかがぴくにつくをしたあとがありました。」というのである。絵を見ると、備え付けの机や椅子がそのまま置いてあったようである。これはいいということになり、第二文の「そこでぼくたちは、ひとやすみして、(熊が持ってきてくれた)ぴーなつつやじゃむをたべました。」ということになる。絵に描かれているように、二匹の熊がぴーなつつを分けたり、ジャムをくれたりする係になり、みんなに分配してくれたようである。大人数に膨らんだので、それだけでは足りない気も湧こうが、幸いなことに机の上には皿にいっぱいアイスクリームやお菓子も置いてあったようで、それが第三文に「また、そこにあった、あいすくりーむやおかしもたべました。」というように、補ってある。絵には、水分が取れるように樽らしきものもあり、安心して食べ、水も飲むことができたようである。

右の33ページの文には、「それから、“はんかちおとし”をひとまわりしました。」とある。ここから「それから」が三つ続く。大人数でする遊びの一つ目である。絵を見ると、先にあった机や椅子の脇に広場のような空間があり、そこでみんなで輪になって、“はんかちおとし”をしたようである。「ひとまわりしました。」とあるので、誰もが一回は鬼になって、誰かの後ろにハンカチを置く役をしたというのであろう。現に、この場ではうさぎが鬼になって、今度は誰の後ろにハンカチを置こうかなと考えているところらしく、みんながうさぎがどうするかわくわくして待っているようである。みんな打ち解けて来はじめたらしい。

次に開いた左の34ページには、「それから、“ろんどんぼしおちた”もやりました。」という本文がある。「それから」で始まる遊びの二つ目である。絵では、特別に大きい象の子たちがロンドン橋になって、ライオンが笑顔で今からくぐり抜けるぞと言わんばかりに象の子たちの太い前足の下をかがんで通り抜けようと構えている。男の子は今うさぎと抜けたところらしく、ほっとしてラッパを吹いている。男の子の横には一緒に橋をくぐったのか、うさぎもいる。みんな、ライオンの後ろに順に並んで、どこで橋が落ちるか注視している。



右の35ページでは、三つ目の遊びに入る。本文は、以下の3文である。

それから、かくれんぼうをしたら、ぼくがおにになりました。みんな、かくれました。でもうさぎだけはかくれないで、じっとすわっていました。

第一文は、「それから」で始まる遊びの三つ目である。まだ、かくれんぼうの始めで、じゃんけんをした結果が書かれている。それゆえ、「かくれんぼう（のじゃんけん）をしたら、ぼくがおにになりました。」という括弧の部分が省略された形と見なすべきものであろう。第二文はその結果で、「みんな、かくれました。」とある。森の中で仲良くなった動物たちが、みんな、一斉に隠れたことがひしひしと感ぜられる文である。第三文は、第二文に関する補足で、みんな隠れて心細いくらいだが、「うさぎだけはかくれないで、(ぼくの近くで) じっとすわっていました。」というのである。「ぼく」は大きな木の幹で、みんなが隠れるところは見えないようにしているが、それでも、近くにうさぎの存在を感じることは、やはり心強いのであろう。「でも」という感情的な逆接が用いられているところに、主人公の嬉しさが感ぜられよう。

絵では、主人公が木の幹で、顔を伏せているところに、隠れた動物たちが、大丈夫かどうか、「ぼく」の方に視線を向けているところである。象は靴を履く方が顔を見せているが、主人公と同じ木の裏側にいるセーターを着た象の顔はみえない。ライオン、カンガルー、猿、コウノトリの顔は見えているが、二匹いた猿、三人家族であったカンガルーは一匹しか見えない。熊などは一匹も姿を見せない。たまたま画面の範囲にはいなかったというだけのこともかもしれないが、後の展開を知っている時には、気になるところになるろう。うさぎだけは、本文に記された通り、「ぼく」が足元に置いたラップを見守るように、隠れずにじっとすわっている。かくれんぼうには参加していないが、それでもかまわない格別の存在なのであろう。

#### (4) 現実に戻る

次の左側36ページには、急激に場面が変化する。本文を先に掲げる。

「もういいかい！」と、ぼくはいつて、めをあけました。

すると、どうぶつは、一ひきもいなくなっていて、そのかわりに、ぼくのおとうさんがいました。おとうさんは、ぼくをさがしていたのです。

第一文は、全く前ページのかくれんぼうの続きである。主人公は決まり通りに木の幹で顔をおおっている時も目をしっかり閉じており、もう大丈夫だろうと思って、目をあけたのである。第二文は「すると、」で始まる。これまでも、初めての動物(ライオン)の登場する時やずっとじっとしているコウノトリが不思議になって、そばまで行ってみた時に出て来た接続詞である。ここでは、うさぎも含めて、動物は一匹も「いなくなってい」というのである。当然、周りも、隠れていそうなところも、探してみたことであろう。それでも、見つからないのである。しかも、「そのかわり」でもあるかのよう、「ぼくのおとうさんがい」という。第三文は、驚いている「ぼく」に父親自らおまえを「さがしていた」んだよと告げたのであろう。それを僕の立場で見れば、「おとうさんは、ぼくをさがしていたのです。」となるのである。第二文の補足説明と言えよう。

右側37ページの本文は、下記のように繰り返される。

「いったいだれとはなしてたんだい？」とおとうさんがききました。

「どうぶつたちとだよ。みんな、かくれているの。」

「だけど、もうおそいよ。うちへかえらなくっちゃ。」と、おとうさんがいいました。「きつと、またこんどまでまっけてくれるよ。」

地の文を含めると、六文ある。第一文は、お父さんの質問から始まる。思い出しやすいのは、前ページの



「もういいかい！」である。楽しそうな息子の声の響きからしてひとりごととは思えず、尋ねたのであろう。「いったいだれとはなしてたんだい」の下線部には、「森の中にはわが子と話す相手などいないはずだが、…」という疑念が強く現れている。第二文・第三文は、それに対する「ぼく」の返事である。ついさっきまで話していたのである。それで、ためらいなく「(一緒に森の中を散歩した) どうぶつたちとだよ。(かくれんぼうをしていて) みんな、かくれているの。」と言えたのである。第四文から第六文は、事情を理解した父の助言である。第四文・第五文は「(楽しく遊んでいるのはわかったよ。) だけど、(時間からして) もうおそいよ。うちへかえらなくっちゃ。」と父は促す。そして、第六文では動物たちに心の残るわが子に、「(一緒に遊んだ動物たちは) きっと、またこんどまで(この森の中で) まっててくれるよ。」とまた会える絆があることを説く。六文あるのは、30-31ページの散歩の行列が完成し、みんなが高揚する場面とこの場面の二カ所であるが、いずれもこの絵本の深みを感じさせるところとなっている。

次の38・39ページは、見開きには一面にはなっていないが、文章は下記のようにつながっている。

それでぼくは、おとうさんのかたぐるまにのって、かえりながらいいました。「さようならあ。みんなまってね。またこんど、／さんぽにきたとき、さがすからね！」

四文で構成されている。第一文は、地の文で、父の助言に納得し、「それでぼくは、おとうさんのかたぐるまにのって(高揚した気持ちを持ち続け)、かえりながらいいました。」というのであろう。第二文は「さようならあ。」と文末が長くなる。寂しさが伴う「さようなら。」ではなく、また会えると確信しての明るいあいさつなのであろう。第三文の「みんなまってね。」は、これだけでは見当がつかないが、第四文の「またこんど、さんぽにきたときさがすからね！」でしっかり伝わる。二文を合わせると、「また今度散歩に来た時(どこに隠れたか) 探すから、みんなまってね。」という複文になるが、そのうち言いたいことを第三文で先に言い、理由づけを後にしたものであろう。こうすることによって、最後の「さんぽにきたときさがすからね。」が、聞き手の心に刻まれるからである。主人公の中では、まだかくれんぼうは終わってはいないんだと、読者も一緒に森の中に心を遊ばせることができるのである。

## 二 エッツ『もりのなか』を読み手として繰り返し声を出して読み、その上で幼児を想定して読むようにする

前項のように本文を知的に整理しても、すぐに読み聞かせができるわけではない。なぜできないか反省してみると、まだ幼児(実際には短大生)に読み聞かせる前に、私自身がまず『もりのなか』の本文を浴びるほど読んではいないという基本的な事実思いいたる。大村はま氏が教科書を手に持って音読することが重なり、手に持つところに穴があいたというように読みひたることが絵本にも不可欠である。知的な整理が単なる繰り返し読みよりも有用ということはあっても、絵本を読むことになれる、読みひたって本文が我がものと思えるようにすることは、熟読には欠くことができまい。そこで、まず通して10回読むことを自らに課し、その上で聞き手を想定して絵本を読み聞かせる練習をしようと計画した。しかし、いつでも本文が読めると思うと、かえって読み聞かせを実演するという切迫感がなくなる。それで、自分で絵本の文章を読むと、次は聞き手を想定して幼児の前で実演するというように、交互におこなうこととした。令和4(2022)年5月24日(火)2限・3限に短大生の前で読み聞かせをして見せることに決め、その前の一コマ分をこの交互に読むことに集中したのである。本稿において読み方・覚え方・場面の展開を研究したこともあり、おおよその流れは念頭にあったが、その場で確認しないとこわいところもあり、幾分時間も費やした。授業の感想から振り返ってみる。

- ⑦絵本の方を向いて読むのと、前を向いて皆に向けて読むのでは、同じ声量でも聞こえ方が全然違うと感じました。だから、短文ずつでも覚えて読む方がいいのかなと思いました。前を向きながら読むことで、聞き手の表情を見れるという良い点があると思いました。
- ⑧先生が前を向いて暗記して本を読んでいて声が聞こえやすかったです。前を向いて読めるようになろうと思います。

- ㉞先生が暗記していて読んでいて、本を見ながら読むのではなくて前を向いて読むことで、声がおどろくということがわかりました。
- ㉟先生はとてもゆっくり読んでおり、伝わりやすい感じがしました。目線も、この前話していた通り（自分で理解する過程では絵本の文章を見、話す時には顔を上げて聞き手と目を合わせる）だったので、本当にすばらしいと考えています。私も先生みたいに読めたらいいなと思います。
- ㊱文章を（目で）読んだ後に正面を向いて読む読み方が一番良いと思いました。
- ㊲先生の読み聞かせは、ほとんど暗記していてスゴイと思いました。
- ㊳先生の話し方も聞きやすいなと思いました。
- ㊴先生の読み聞かせの仕方では、しっかり文を覚えて読んでいることがわかりました。
- ㊵覚えてから読む方法にすると、覚える（あるいは確認する）時間に子どもたちの集中が切れてしまうのではないかと不安になりました。
- ㊶保育者が全文覚えている間に子どもたちは絵本に飽いてしまう可能性があると思ったので、暗記は事前に準備が必要だと思いました。
- ㊷先生の読み方だったら、子どもが飽きると思います。
- ㊸先生の読み方を聞くと、正直子どもも待ってしまい、絵本に飽きてしまうと感じました。
- ㊹先生の暗記して読んでいるのを見て、本を暗記することは、とても難しいことなんだなと思いました。
- ㊺「すると」や「それは」などの語尾を上げると、見ている人は次の場面への興味をそそられるということを実感し、私もやってみようと思いました。

ほぼ良さも不十分さもとらえられている。出発点に、読み聞かせと言いながら、読み聞かせる相手をしっかり見ていないという反省があり、読み聞かせに専門性を持たせたい、どんなふうに絵本の読み聞かせの力をつければよいか具体的な学習の見通しを得たいということに進んでいったものである。そのため、㉞～㊹のとらえかたはいずれも望ましいものである。また、㊲・㊳・㊴は文を覚えたことを評価したもの、㊵は覚えたこと・本文をこの場で確認したことをとにかく言うのでなく、速さなどを含めて聞きやすいものにしたことを肯定的に評価したものである。㊶は、本人は意識していなかったが、接続詞・指示語の高低にも着目したものである。

ただし、頭の中に構造的に入れたものを暗記したものとまとめられると違和感が残る。本文を知的に整理したものと、相手を念頭に置かない口頭での本文への読み慣れと、幼児（もしくは実習に行く短大生）を視野に入れての実地練習の積み重ねの総体が暗記と呼ばれているものの正体にほかならない。しかも、それは安定していつも出てくるようなものではなく、実際の読み聞かせしている際の新たな場面にどういうことがどんなふうに述べられているかの確認がしっかりできるか否かで言えるかどうかが決まってくるのである。

しかし、各場面の本文をきちんと踏まえようとすればするほど時間がかかり、㊴～㊶の指摘のように幼児が我慢できなくなる（もしくは、実習生自身がそのように間を空けることがこわくなってしまふ）恐れがある。そうだとすれば、読み聞かせている途中で本文の確認はできるだけ圧縮して、その前に取り上げる絵本を暗誦に近いぐらいにくり返し読み慣れ、読み聞かせることになれておくしかない。しかし、そのような特別な絵本を何十冊も何百冊も持つわけにはいかず、結局のところ教師が格別に愛着を持つ少数の絵本とその場しのぎで読む大多数の絵本とに分かれてしまうことになる。

そうだとすれば、やはり教師がその場で絵本にどのようなことがいくつの文で書かれているかを確認する時間をある程度は保証しなければなるまい。しかし、どんな本ならどのくらい時間をかけてよいかも、今から調べていかなければならないことである。幼稚園教諭・保育士の絵本の読み聞かせを専門性を持ったものにする営為は、今始まったばかりと言えよう。

## 終わりに

本稿で明らかにしたことは、以下の4点になろう。

- 1、実際に読み聞かせする時には、本文の見開き一面、もしくは開いたときの絵・文に即して絵本の文章を頭に入れる過程と幼児に向かって声を届ける過程とがあること。そのいずれをもしっかりと実行しようとする

れば、本文にどんなことがどんな文面でどんな順序で書かれているかを頭に刻み込もうとするため時間がかかるし、それを幼児の年齢・理解力に応じてどのような速さでどんなふうに読めばよいのか配慮もある。そうすると、二つのいずれの過程においても、この場だけで幼児の心に残る場にするということは至難で、当然事前の準備・練習が不可欠になってくる。

- 2、事前の文章を知的に整理することも、主人公の心情を追究しておくことも、幼児は絵から理解していくということから考えて、絵の展開の研究をしておくことも、場面ごとの絵と文との関わりを調べておくことも、本文を頭に入れるためには、いずれも重要なことである。それぞれの絵本に応じてここでは何に着目しようかと決めたり、読み聞かせする場が迫っていて、今回は時間的に無理なので諦めることにしたりする必要がある。
- 3、他方、読み聞かせの原点である声に出して読むことは、最重要のことである。声に出して読まなければ、読み聞かせには踏み出せないのである。ただし、この通読には、自分が口頭で読むことになれる段階と、聞き手を想定して絵本を見せながらその場で本文を理解・確認して聞き手にどんなことが書かれているかわかってもらう段階とがある。両者は、違うのであるが、相乗効果を生むためには、交互に行う方がよからう。
- 4、今回、絵本の読み聞かせにはその場で絵本を読んで頭に刻む過程と幼児の方に向き直って書かれている本文を生きた言葉にして声を届ける過程があり、それを実際に体験してみるとどんなふうになるかはおおよそ見せることができた。当然なるほどと思える人とそれでは教師が絵本の叙述を読んでいる時間がかかりすぎて、幼児は飽きる（ついて来れない）と思う人とがあり、その両方を満足させるにはその場では一望しただけで本文をすぐ再現できるようにするほかはない。それはこちらがまだ実現できていないため、学生がまねたいと思う前の段階にとどまっている。一つのあり方を不完全に示したにとどまっている。さらに、練習を積み重ね、こういう読み聞かせならしてみたいと多くの学生が思えるようにしたい。

なお、今回は、本文を知的に整理する方を先にし、その後に通読練習を後にしたのであるが、本来は反対にすべきものであろう。それゆえ、絵本の読み聞かせ化としては、通読練習を本体にして、知的整理を副次的に加えて、改めて検証しなければなるまい。

#### 〈注〉

- 1) 紙の帽子は、新聞紙の一面（もともと2ページ分あるものををはさみで半分に切ったもの）をそのまま縦長の長方形のまま机に置き、折り目通り半分に折ってその折り目の左端（もしくは右端）を円錐の頂点になるように、左の端（もしくは右端）を下まで元ある線の通りに糊付けしていき、円錐の底の部分を丸くなるように切りそろえれば、きれいにつくりあげることができる。この主人公が糊付けしたところをわざわざ前にしているのも、こうやって糊付けしたらできたという誇らしい思いが湧くからにほかなるまい。

## **Practical Study of Storytelling of Picture Books-Through“*In the Woods*”**

Shinsyo MAEDA

Advanced Course of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### **Abstract**

The Purpose of this Study is to systematize instruction by making use of the process of reading picture books aloud, in which there is a process of understanding the sentences of each scene and the process of expressing them.